

11

海部

高台寺小学校

内山真悠子

分科会番号

7

分科会名

美術教育

研究題目

楽しく豊かな生活を創造しようとする子どもの育成
 ～ 対話活動を通して自分のおもいを表現しようとする造形活動 ～

研究要項

1 はじめに

本校では「対話活動」を中心とした図画工作科での授業実践を令和5年度まで進めてきた。その結果、対話の素地を養うためのさまざまな取組を通して、型に沿った対話活動から、相手や題材などに合わせて子どもたち自身がその型を自然に取り入れながら、楽しそうに対話活動する姿が見られるようになってきた。中でも、他学年や全校と関わり合って表現や鑑賞を楽しむ活動を取り入れたことで、生活と結び付けてものをつくりだす喜びを分かち合う姿や、自分の作品やおもいに自信をもちこだわりをもって自己の表現を工夫する姿が多く見られるようになってきた。このことから、児童はこれまでの実践から、つくりだす喜びを味わうことができるようになってきたと考えられる。その一方で、自分のおもいを表現するためのよりよい表現方法を模索し、納得感をもって表現する児童を育成するためには、まだまだ取り組むべき手立てがあるように思われる。

児童が作品づくりをしていく上で、自分の作品を振り返り、よりよい表現方法を見つけるためには、学習段階に応じて自分のおもいを見つめたり、他者の作品を鑑賞したりすることが効果的であると考え。例えば、作品をつくり始める前の場面では、「自分はどのような作品をつくりたいのか、自分ならこうしたい」というおもいをしっかりと見つめて、題材全体を通して自分のおもいを表現するための目標をもたせることができると考える。中間鑑賞の場面では、他者の作品を鑑賞したり、自身の作品を見つめ直したり、素材や道具について自身の表現したいことに適しているかなどを振り返ることで、自分のおもいを広げたり深めたりすることができる。製作後には、同学年のみならず他学年の作品を鑑賞したり、自分のおもいを伝えたりする取組を行っていくことで、新たな作品づくりに生かすことができると考える。また、教師が製作者のおもいを引き出すための働きかけや、タブレット端末を活用した振り返りを行うことも、自分の作品に納得感や充実感をもつ児童を育成するために、工夫の余地があると考え。

本年度は、これまで培ってきた対話活動を生かしながら、学習段階に応じた鑑賞の場の設定方法や、教師の働きかけ、タブレット端末を活用した効果的な振り返りの仕方等を検証していきたい。そうすることで、本研究の主題である「豊かな生活を創造しようとする子ども」の育成をめざしていきたい。

2 めざす子ども像

- ・ よりよい表現方法を模索して、自信をもって表現することができる子
- ・ 子ども同士の対話活動を通して自分のおもいを広げたり深めたりすることで、納得感や充実感を味わえる子

3 研究の仮説

- (1) 対話活動を生かしながら、学習段階に応じた鑑賞の方法を工夫すれば、よりよい表現方法を模索し、自信をもって表現する子を育成することができるだろう。

(2) 教師の働きかけやタブレット端末を活用した振り返りの場を工夫すれば、児童は自分のおもいを深めたり広げたりすることができ、納得感や充実感を味わえる子を育成することができるだろう。

4 具体的な手だて

(1) 仮説1への手だて

① 学習段階に応じた鑑賞の場の設定【手だて①】

ア 作品製作前【手だて①—1】

- ・ 子どもたちがどのような作品をつかっていきたいのか、自分のおもいと向き合い、作品のイメージをもつことができるような導入の場を設定する。

イ 中間鑑賞【手だて①—2】

- ・ 対話活動を取り入れながら他者の作品や自身の作品を鑑賞する。

ウ 作品完成後【手だて①—3】

- ・ 対話活動を取り入れながら他者の作品や自身の作品を鑑賞する。
- ・ 他学年と表現や鑑賞を楽しむ活動を展開する。

(2) 仮説2への手だて

① 教師の働きかけの工夫【手だて②】

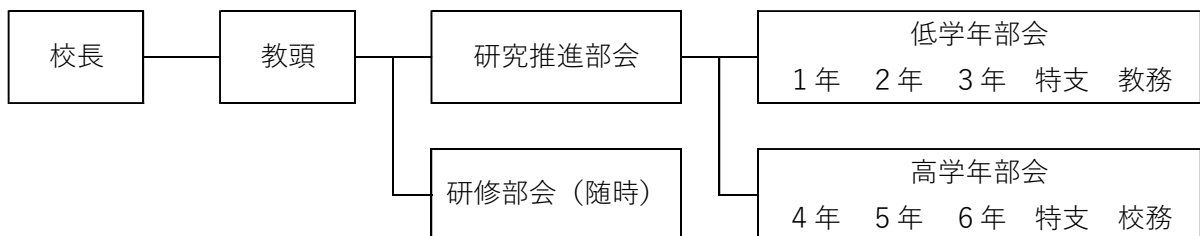
- ・ 対話活動のみならず、自分の思いと向き合う時間も設ける。

② タブレット端末を活用した振り返りの工夫【手だて③】

- ・ 学習を振り返る場面で、タブレットを効果的に利用する。

5 研究の方法

(1) 研究の組織



(2) 実践計画

月	研修内容	月	研修内容
4	組織作り・研究計画・環境整備	9~10	授業案検討会・授業実践 授業研究協議会
5~7	授業案検討会・授業研究 授業研究協議会・実態把握	11~1	授業案検討会・授業実践 授業研究協議会・今年度のまとめ
8	発表内容の検討・研究内容の修正	2~3	次年度の計画

6 実践と考察

(1) 第3学年① 学習段階に応じた鑑賞の場の設定【手だて①—1】

教師の働きかけの工夫【手だて②】

「顔をだしたらなんだかわくわく」

作品をつくり始める前に、子どもたちがつくりたいものをイメージし、具体的な目標をもって製作ができるよう、自分のおもいと向き合う場を設けた。「のぞいてみるとなに見える？」という声かけをすることで、普通では見るできないところをのぞきたい、という気持ちをもたせ、自分がつくりたいものを具体的にイメージすることができるようにした。その後、いろいろな顔出しパネルの画像を見せることで、「そんなところから顔をだしてもいいんだね」という声が子どもたちから聞こえてくるなど、どこをのぞこうかな、どんな風にのぞこうかな、とわくわくしながらイメージを膨らませることができた。

自信をもって作品をつくり出すことができるように、事前に試す場と、鑑賞する場を設けた。試す場では、大きな紙を渡し、顔を出したいと思う場所に自分の顔写真を置き、そこからどんな世界をのぞくことができるのか、クレパスを使って描いていった。何度でもやり直しができるという安心から、宇宙や海の中などさまざまな世界をどんどん試して描いていく姿が印象的だった(資料1)。

その後、「迷っているところを相談してみよう」と声をかけ、試し描きしたものを使いながら、本製作に入る前段階での鑑賞を行った。「太陽から顔を出すか、ロケットから顔を出すかどっちがいいかな?」「何人も入れるパネルにしたいんだけど、どこに穴をあけたらいいと思う?」と友達の意見を求めながらアイデアを膨らませている姿が見られた。中には、「のぞきたい世界が多すぎて決められない」と試した紙を見比べながら話すなど、アイデアがたくさん出てきて、どれをつくろうかと悩む児童もおり、意欲的に製作に取り組む様子が見られた。その結果、実際に製作を始める時には、自分のイメージを形にしていこうと、わくわくしながら積極的に取り組むことができた。



【資料1 事前に試している様子】

(2) 第3学年② タブレット端末を活用した振り返りの工夫【手だて③】

「顔をだしたらなんだかわくわく」

毎時間の振り返りとして、タブレット端末を活用した。製作途中の作品を写真に撮り、迷っているところを友達と話し合ったり、自分の作品を見ながら付け足したいものを考えたりして振り返りをした。その後、次の時間に付け足したいものをタブレット端末の写真に描き込んでいった。簡単にかき足すことができるタブレット端末を活用することで、限られた時間の中でも効果的に振り返りをすることができ、次時の授業の際には、振り返りの写真を見返して前時のポイントを思い出し、意欲を持続させたままスムーズに製作に入っていくことができた(資料2)。

【資料2 タブレット端末を活用した振り返り】



(3) 第3学年③ 学習段階に応じた鑑賞の場の設定【手だて①—3】

「顔をだしたらなんだかわくわく」

完成後には、クラス全体で作品の鑑賞を行った。完成した作品を並べて、「好きなところに写真を撮りに行っていいよ」と声をかけた。友達作品を見て質問をしたり、作品から顔を出して、とても楽しそうに写真を撮ったりしている姿が見られた。自分のつくった作品から、たくさんの子が顔を出して写真を撮っている様子を見て、製作者も自信をもって作品の紹介をすることができていた(資料3)。



【資料3 完成作品を紹介しながら撮影している様子】

完成後の自己評価では、自分の作品に満足していると答えた児童が8割を超えていた。「友達に楽しいパネルだねと言ってもらえてうれしかった。他の学年の子にも紹介したい」や「みんなの作品で写真がとれたので思い出に残った」という意見が多くあり、自分の作品に自信をもち、互いに認め合いながら活動できたことが分かった。

(4) 第5学年 学習段階に応じた鑑賞の場の設定【手だて①—2】

「糸のこスイスイ」

二枚重ねた板を電動板のこぎりを使って切り、切りあがった同じ形の二枚の板をさまざまに組み合わせて、立体的な作品をつくる活動を行った。その中で、「作品をどのように見立てられるか友達と話し合おう」という目標で中間鑑賞を行った。



【資料4 対話活動の様子】

中間鑑賞の場では、まず、板を組み合わせたらどのようなものに見えてくるか自己内対話を行った。板の組み合わせから想像を広げ、すぐに見立てることができる児童もいたが、最初に見えた形に固執してしまい、何に見えてくるか分からないという児童も見られた。そこで、次のグループ鑑賞では、どのように見立てたのか、見立てたものを分かりやすく伝えるには、どのように板を組み合わせるとよいか、などの観点で対話活動を行った(資料4)。また、初めの自己内対話で迷っていた子どもにも、「友達と一緒に考えられるから、途中まででも考えたことを話してみても」と声をかけた。グループでの対話を通して、「板の向きを変えてみると犬がほえているようにも表現できるよ」や「このような順番で組み合わせると、波から顔を出しているみたいだね」などといった、自己内対話では気付かなかった考えをいろいろともつことができた。中間鑑賞を通して想像が広がり、板の向きや組み合わせる順番など、細部にも気を配りながら製作することができた(資料5)。



【資料5 完成作品】

(5) 第6学年 学習段階に応じた鑑賞の場の設定【手だて①—2】

「この筆あと、どんな空？」

さまざまな空の美術作品を、「筆あと」に着目させながら見せた。また、一人一人がタブレット端末で空の作品を調べることで、筆あとの違いによる空の表し方や受ける感じの違いに関心をもてるようにした。その後、「筆使い」や「色使い」を工夫して空を製作した。中間鑑賞でそれぞれが想像した空のイメージを伝え合った後、その空の風景の中に、あるといいなと思うものを付け加えさせた。最後に「空から広がるイメージ(物語)を伝え合おう」とめあてを立て、完成作品を鑑賞する場を設定した。

中間鑑賞では、画用紙一面に描いた空の絵をじっくりと見せてから「筆あと」と「色使い」に着目させて対話活動を行った。「どうしてななめに塗ったの?」「少し風が強い感じにしたかったから、ななめに筆を動かしたよ」や「色が混ざり合って吸い込まれるような空だね」など、互いの作品に関心を寄せ、自信をもって描いたことを伝え合う様子が見られた。



【資料6 完成後の鑑賞の様子】

(6) 第6学年 学習段階に応じた鑑賞の場の設定【手だて①—3】

タブレット端末を活用した振り返りの工夫【手だて③】

「この筆あと、どんな空?」

完成後の鑑賞では、中間鑑賞で見せ合った絵をタブレット端末で見せた後、付け加えた絵から広がる物語を伝え合う活動をした(資料6)。飛行機を付け加えた児童は、「飛行機を斜め上に向かせたことで、今から始まる!という物語にしたかった」と伝え、「飛行機が空の奥に飛んでいる感じがして、どんなことが起こるのかわくわくしたよ」と言葉をもらっていた。夜空に鳥を2羽付け加えた児童は、「明るい方へ鳥が飛んでいて、よいことがありそう」と言葉をもらい、うれしそうに頷いていた(資料7)。中間鑑賞後に付け加えをし、完成後の鑑賞をしたことにより、互いに作品の変化や広がりについて認め合うことができ、自信につながったことが分かった。また、友達の表現に興味をもち、次はその表現を使ってみたいという様子が見られた。



【資料7 完成作品】

(7) 第2学年 学習段階に応じた鑑賞の場の設定【手だて①—3】

「くしゃくしゃぎゅ」

紙をくしゃくしゃにすることで、その形や触感からイメージを膨らませ、丸めた新聞紙の中に詰めて立体的な作品をつかった。作品完成後の鑑賞として、3年生に対して、それぞれの作品を紹介する活動を行った(資料8)。



【資料8 3年生との鑑賞の様子】

事前に、作品づくりや製作過程で工夫したことや難しかったところを振り返り、自分自身の言葉で紹介ができるようにした。鑑賞はグループで行い、2年生が作品の紹介をしたあとに、3年生から作品のよいと思った部分の「ほめほめポイント」と、こうするとよりよい作品になると思った部分の「わくわくポイント」の二つを伝えてもらった。「ほめほめポイント」では、2年生が紹介の中で話した部分を中心に、「左右どちらから見ても、表情を変えていて楽しめる」ところがいいと思う」や、「カラフルで楽しそうだね、まねしてみたい」と、作品のつくり方や、使った素材や色の選び方などのよさを伝えてもらった。「わくわくポイント」では、「中身の新聞紙をもっと入れると安定するよ」や、「もう少し色を付け足すとかわくなるよ」と、自分では気付かなかった点を、さまざまな視点から伝えてもらった。



【資料9 付け足しをした作品】

また、それぞれのグループでの鑑賞後に、全体で「わくわくポイント」の共有をした。自分の教えてもらったことを伝えて全体に共有することで、より自分のおもいを深めたり広げたりすることができた。2年生は、「教えてもらったやり方でもう一回つくりたい」と、すぐに手直しや付け足しをしたり、次の立体作品づくりに意欲的な姿勢を見せたりしていた(資料9)。

また、作品を鑑賞した3年生は、「去年つくった作品だから、去年のことを思い出しながらかん賞す

ることができた」と前年の自分を振り返りながら鑑賞をしたり、「今年もかざりを付ける作品があったら、2年生がやっていた付け方を試してみたい」と自己の作品づくりに生かそうとしていた。

7 仮説の検証

(1) 仮説1について

製作前の鑑賞では、鑑賞する場と同時に、事前に試す場を設けた。何度でもやり直しができるという安心感のもと、友達の意見を求めながらアイデアを膨らませ、自信をもって表現する姿が見られた。また、中間鑑賞の場面では、自己内対話の時間を設定し、作品に対する自分のおもいを再確認する時間を設けた上で他者との対話活動を行った。そうすることで、自分では気付かなかった考えに気付くことができた。よりよい表現方法を模索するのに有意義な手立てであった。

他学年と表現や鑑賞を楽しむ活動では、製作過程での工夫や難しかったことなどを思い返すことで、自分のおもいを再確認することができた。また、他学年の児童から、作品のよいところを「ほめほめポイント」として褒めてもらい、納得感や充実感を味わうことができた。他学年の児童は、前年に同じ題材を取り組んでいるため、自身の経験を想起して鑑賞しており、より製作者の気持ちに寄り添うことができた。他学年からもらう「ほめほめポイント」や「わくわくポイント」が製作者にとっての充実感につながり、次回の作品づくりに向けて意欲を示す児童が多く見られた。

(2) 仮説2について

作品をつくり始める前に自分のおもいとじっくり向き合い、作品のイメージをもつことができるように教師が働きかけることで、「こうしたら面白そう」「こんな風につくってみたい」、というように自分のおもいをしっかりともち、具体的に作品のイメージを膨らませながら、一人一人が目標をもって製作に取りかかることができた。タブレット端末を使った振り返り活動では、現段階での自分の作品を客観的に見つめ直し、どうしたらよりよい作品へとなくなっていくのか考えるよい機会となった。自分のアイデアを手軽に加除修正できるタブレット端末の利用は、製作の時間を確保しつつ、自分のおもいを深めていくという点においてとても効果的であった。また、次時の授業の際には、タブレット端末にかき込んだ振り返りの写真を短時間で確認でき、スムーズに製作に入っていくことができた。タブレット端末を活用した振り返りは有効な手だてであった。

8 成果と課題

4年間の研究で、自己内対話や他者との対話、自分の作品との対話などのさまざまな対話活動を通し、子どもたちは自分のおもいをしっかりともち、製作に取り組むことができるようになった。また、鑑賞活動を工夫することで、上記のさまざまな対話活動でもった自分のおもいを、より表現に生かすことができるようになった。さらに、子どもたちが自信をもって製作活動に取り組んだり、認め合いながら活動したりすることができるようにもなった。さらに、タブレット端末を効果的に使用することにより、短時間で効率的な振り返りをすることができ、子どもたちの意欲の持続につながった。特に、他学年との鑑賞では、自身の製作体験を生かして鑑賞をしたり、現在取り組んでいる題材への生かし方を考えたりすることができ、互いに納得感や充実感を味わえる有意義な場となった。その一方で、全ての題材で他学年との鑑賞を行うことは難しく、どの題材で他学年との鑑賞を行うとより効果的なのかを見極める必要があることが課題だと感じた。また、タブレット端末を活用した授業展開についても、図画工作科の授業に限らず、さまざまな教科で、より効率的な活用方法を研究していく必要があると感じた。

今後は、今回講じた手だてを生かし、上記の課題を踏まえてさらに実践を積み重ねていきたい。